

三遊亭らん丈 後援会会報

『後厄を迎えて』

『どうしましょ』

三遊亭らん丈

人間にとって最も知りたいことは、実は最も知りたくないことでもあります。

何やら判じ物のような書き出しとなりましたが、知りたくもあり、実は決して知りたくはないものとは、本人の命数です。つまり、人が生きるとは、日一日と死に向かつて歩を進めていることに他ならないのですが、大抵の人は、自分の寿命がいつ尽きるか、そんなことにはほとんど頓着せず、日々ルーティーンをこなすが如く、いたずらに時を消費して過ごしてしまいません。

これと同じことを、日本の哲学者の中では現在最も精力的な著作活動をしている中島義道が、その著作『哲学の道場』(ちく

ま新書)でこう云っています。ちよつと長めになりますが、以下に引用します。「哲学が難しいのは、けつしてその言葉が難しいからではない。私たちにとって、自分の最も関心のある問いを徹底的にこまかさず

に問い続けることが難しいからです。その問いとは、自分が今生きており多分まもなく いやまかりまちがえば今夜にでも死んでしまつたろうということ。そして、ひとたび死んでしまえば多分二度と生き返らないこと、(中略)永遠に無のままだということです。」

どうしてこんなマジなことを云い出すのか。それは、今年満四十二歳、つまり後厄となり、もはや自分の人生も折り返し点を

廻ってしまったとの感懐があり、併せて一月に桂三木助師、四月に古今亭右朝師と立て続けによく知る二人の先輩が、余りにも若くして冥界へと旅立ってしまったこと、そして何といつても決定的なのが、一昨年交通事故に遭い全治四週間の大怪我をしたこと、以上の三点が緋^ひい交ぜになっているにもなく気分がナーバスなものになっているのです。

そもそもが嘶家になるぐらいですから、多くの性格は向日性をその特色とするのですが、時あたかも経済、政治、人心、至るところで戦後ただ効率のみを追い求め、人としての道に頓着しないで過ごしてきた綻びが露呈し始め、凋落の一途を辿る国日本の時代相とも相俟って、いささかならずニヒリスティックな思いに捕らわれております。

この思いは、歴史学者の網野善彦が云うように、もはや国家としての日本が青年期

2001年6月1日発行
第13号 頒価100円
三遊亭らん丈後援会
E-mail:s-ranjo@excite.co.jp
東京都墨田区太平1-15-3-903
TEL 03(5608)0802
携帯TEL 090(8726)0796
FAX 03(5608)0803

から壮年期へとさしかかっているからこそ漂わせる一抹の停滞感がなせていることなのでしょうか。もしもそうならば、国家としては疾うに中年期を迎えた先達イギリスのような、豊かな稔りを日本の民草は享受していると云えましょか。

今の日本を見ると、若いも若きも手には携帯電話を持ち、情報奴隷に成り下がったかの如く、非主体的な生き方をしているようにしか見えません。

時代が閉塞した状況を呈すると、我々はしばしば芸術に風穴を明ける役目を担わせてきました。たとえば十九世紀後半に起こったフランス印象派の美術運動は、フランス第三共和制の成立に拮抗しようとしたものでしょうし、一九二九年に端を發した世界大恐慌に抗して、アメリカではJAZZが興隆したように。今日の日本へと目を転じれば、ほんのささやかな一例ではありますが、一九八〇年代以降の宮崎駿監督作品がなければ、我々はどんなにか寂しい邦画事情に甘んじなければならなかったことでしょう。あるいは小沢征爾のいない音楽界を想像してご覧なさい。薄ら寒い思いに囚われてしまつことでしょう。

その小沢征爾がこう云っていました。

「二十代の頃は、出来ないことは何もないと思つていた。ところが、三十代になると、出来ることと出来ないことが分かるようになった」と。あの小沢にして三十代で出来ないことが分かつたと云うのが、あまたの凡人と違つるところです。

ぼくのような凡人以下の雑魚は、その出来ることと出来ないことの見極めがごく苦手です。それでも冒頭に記したように、もはや死を、実感を伴つて思つ年齢となつたからには、そろそろ自分が最もしたいことをしても、世間様からお許しを頂けるのではないかと思うようになり、六月より定期的な独り会を始めさせていただくことに致しました。

この会は従来の落語会とは趣を違え、日頃ぼくが思つていふことを可能な限り直截に反映させたものとなるでしょう。第一回目のテーマは「教育」です。そこに、今の日本が抱えている問題が集約されていると考えているからです。

たとえば、我々はほんの百年前までは世界にも稀なる清々しい精神をその真骨頂とした人民、と云われていたものです。それが、この体たらくです。人心の荒廃は思いの外一気に進みます。来世紀になると、

「そつえば二十一世紀初等までは東洋の片隅に日本という国があつたらしいけど、今はさて、どうなつちやつたのかなあ」、なんてなことになるかねないので。まさかとは思いますが。

そうしないためにも当夜は多彩なゲストをお招きして、ひとつみっちり教育について考えてみたいのです。つまり、天然資源のない日本はただ、人にしか資源を見出し得ません。そして人を人として成り立たせるうえで最も肝要なのは、云うまでもなく教育です。

とはいうものの、落語会で教育について論じること自体、充分に異常なことだと我ながら思います。だいたいが落語家なんてほんの先頃まで後ろ指を指されていたのですから。それが、教育をテーマに落語会ですからね。変われば変わるものです。よつて、独演会の名称は『どうしまシヨウ』といたしました。ほんと、どうしまシヨウ。そして、何より心配しているのはお客様の入りです。ゲストをお招きしている手前、余りにも少ないお客様では、ゲストの方にも失礼ですから、多くのお客様のお越しをただただひたすら、お願い申し上げます。どうぞよろしくお願いいたします。

『二度目の学生日録』

三遊亭らん丈

すでにこの会報では何度か触れているように、ついぞ勉強しなかった学生時代を反省し、昨年より物好きなことに再び大学へと通うようになりました。今はやりの社会人入学というやつです。

勝手知ったる以前と同じ大学ですから、十九年ぶりの学生とはいえ、特段驚くようなことはありませんが、それでも仔細にキヤンパスを眺めれば、ありがたいことにネタがそこかしこに転がってくれています。大学で拾ったネタのあれやこれやを以下に綴りますので、御興味を持たれた方からは、しばらくのお暇を頂戴いたしましょうか。

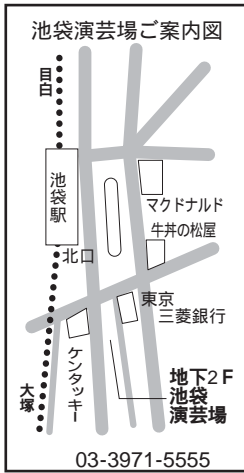
今年度から、東京北西部に位置する学習院、学習院女子、日本女子、早稲田、立教の五大学間で相互の授業科目において、取得した単位を自大学の卒業単位に算入可能にした、五大学間単位互換制度が発足しました。ぼくは、是非もなく学習院女子、日本女子の二大学での授業を希望したのですが、抽選の結果、早大の授業しか受講は許されませんでした。日頃の行いが悪いと

どこで割を食うか分かりません。それでも早稲田ならば広末涼子に遇えるかもしれないと、ミーハーのぼくは胸をときめかせて、文学部のある戸山キャンパスへと向かったのです。広末さんが西早稲田キャンパスにある教育学部の学生とは知っていますが、戸山キャンパスでも立教にいるよりはるかに遇えるチャンスが大きいでしょうから。ただ、誠に残念なことに今にいたるまで広末さんに似た人にさえも、お会いしていませんが。

早大に行つて最大の楽しみが、学生食堂です。アホかと思うでしょうが、ぼくを知る人はご存知のように、ぼくは不味いものには目がないので、つくづく早稲田の学食を堪能しております。なにしろその昔、最初の学生だった時分、高校の同級生が早稲田に入ったので、その友と会うため早稲田を訪ね、ついでに学食に入って食べた、ミックスフライ定食が凄かった。フライを割り箸で二つに切り分けようとしたところ、あまりの硬さに割り箸がペキンッと呆気な

く折れてしまったのでした。さすが硬派の早稲田だけにフライまでこんなに硬いのかと、妙な感心をしたものでした。そこいくと、我が立教のフライの柔らかいこといつたら、舌に乗せるとトロリととろけるというのは、もちろん嘘ですが、学風はあつと学生食堂の料理にまで及ぶのかと、認識を新たにしたものでした。ただ、何事にも例外はあるものでして、上智大の学食ではなんと、ビールを売っているのです。さすがに焼酎は売っていませんでしたが。

これはいまだきの学生に限ったことですが、ペットボトルを持ち歩いて、水分補給に余念がありません。始めは、二日酔いのために止むにやまれず持っているのかと思つていましたが、どうも違うらしい。単純に喉が渇くらしいのです。ぼくは喉が乾いたときには、キャンパスのそこかしこにある冷水機のお世話になっていきます。冷水機から出る水を腰をかがめて飲んでいると、つくづく落魄の気分を味えます。つまり、ペットボトルも買えない貧乏な学生を知らず知らずのうちに演じている自分に気づくのです。尤も、その冷水のあまりの不味さに、口直しに改めてペットボトルを買うのですから、やはり馬鹿ですね。



「ごうしまシヨウ」案内

六月二十八日 午後六時半開演
池袋演芸場(左図参照)にて 前売・千八百円

何しろ独演会は初めてですので、まるつきり手探りの状態です。決まっているのは 教育 をテーマにするということだけです。とは云っても、落語会で教育がテーマと聞いて、大半の方は頭の中に?マークがいくつも浮かんだことでしょう。御もつともです。では、申し上げましょう。らん丈は『小言幸兵衛』という落語ともう一席、併せて落語を二席させていただきました。『小言幸兵衛』と教育との関係は、おそらくありません。しいてこじつければ、小言はほとんどの場合、小言を云う者の勝手であって、ほんの僅かの例外を除いては、云われる者のことを考えて発せられるものではないということぐらいでしょうか。つまり、小言に教育的効果はほとんど見出せません。よく「云いたかないけど」を枕言葉に、おもむろに小言を云う方がいらっしやいますが、そんなら云わなくてもいいのに、と思い、したがっていまでも小言を云われるのは日常茶飯事です、小言を云う

たことはほとんどないのです。

当日は、現在マスコミへの露出頻度は中央官僚でもトップクラスの寺脇研さん(文部科学省審議官)、ぼくの落語会にはほとんどご来場くださる中学校校長の鈴木伸男先生。やはりぼくの落語会にはよくいらっしやる結城史隆教授(文化人類学)が昨年受講した授業科目の中で最も感銘を受けた先生のお一人、谷口洋志教授(公共経済学)、教育委員会等地域教育の改革を推進している立教の先輩 江東区議会議員の鈴木清人さん。多士済濟のゲストをお招きしておりますので、その方々をお目当てにどうぞ、梅雨期に入り生憎とその夜も雨模様かもしれませんが、是非とものご来場を切にお願い申し上げます。

《後援会会費継続納入のお願い》

本会報発刊は平成九年五月でしたから、早いものでもう四年以上経ちます。ですから最初期に後援会にお入りいただいた方は、初回納入いただいた三年分の年会費が既に期限切れとなっております。従いまして、引き続き後援会会員となっておりますのではないかと、篤志あふれる方は下記の口座まで会費をお振込みくださいますよう、心からお願い申し上げます。もちろん継続の方に限り、入会金は頂けません。お客様の申し召しが、一人の落語家を救つのです。よろしくお願い致します。

E-mailアドレスを開設しました。

ご意見や叱責をぜひご送り返してください。
s-ranjo@excite.co.jp

「三遊亭らん丈」後援会入会要項

入会金(会員証作製費+郵送料)として入会者全員から二千円申し受けます。
年会費は四千円ですが、池袋演芸場で行う『趣味の演芸』の入場券(二千円)を年間で二枚差し上げます。

- ★入会金二千円+年会費三年分一万二千円 一万八〇〇円、合計二、八〇〇円
 - ★年会費を三年分前納して下さった方には、10%割引させていただきます。
 - ★入会金二千円+年会費二年分八千円 七六〇〇円、合計九、六〇〇円
 - ★年会費を二年分前納して下さった方には、5%割引させていただきます。
 - ★入会金二千円+年会費一年分四千円、合計六、〇〇〇円
- 会員証と後援会会報のみ御送ります。

振込先口座

- 郵便振替・口座番号 00100 1 730458
- 加入者名・三遊亭らん丈後援会
- 《東京三菱銀行・町田支店》
- 普通預金・1897690 三遊亭らん丈
- 《東京三菱銀行・渋谷支店》
- 貯蓄預金・2670484 三遊亭らん丈
- 《三和銀行・町田支店》
- 貯蓄預金・1096152 三遊亭らん丈
- 《三井住友銀行・上野支店》
- 貯蓄預金・7268919 三遊亭らん丈

【問合せ・オフィスらん丈】

FAXTEL (03) 5608 0802
(03) 5608 0803